

＜ヒアリングによる小林委員からの意見要旨＞

神宮前五丁目地区まちづくり検討会（第4回）開催後（1月8日）、ヒアリングにより、小林委員からご意見を伺い、以下のとおり意見要旨として取りまとめた。

- ・ 有栖川の図書館を移転して、新しい図書館を模索し機能強化を図るという方向性については大賛成である。行政のサービスの中でも住民にもっとも使われるのが図書館のサービスだということを聞いたことがある。是非今後の新しい図書館のあり方を模索してほしい。
- ・ 昔は、「世界中の書物を集めること」＝「知の拠点」であった。新しいコンセプトの図書館を構想するのであれば、これから収集していく本という書物の今後についても見据えて、図書館のあり方を考えてほしい。単に図書だけではなく、日本の文化として重要な位置付けの漫画などやアニメのようなものを収集していくということを考えてもいいかもしれない。そして、もちろん図書は、ただ収集しているだけでは意味がないので、知を生み出すためにどのようにそれらを活用していくのが適切なのか、それを実現していく組織の仕組みや体制も重要になると思う。
- ・ 劇場についても、固定的なイメージで捉えるのではなく、新しい表現活動を刺激するような場というのを考えられるといい。ステージと客席が固定してあるタイプのホールもそれなりにニーズがあると思うので、あってもいい。ただ、1, 200人規模の劇場ということになると、それなりに業として成り立っている人たちが借りたり、使ったりというイメージである。近年、劇場スペースの新築計画が相次いでいるので、同じタイプのものでない方がよい。このスペースの運営をどうするかという点は考えておく必要がある。
- ・ 1980年代に作られたハイスペックな劇場施設や設備が十分に使われなかったことを考えると、ステージと客席が固定してあるものではなく、新しい表現活動が生まれるような、自由で柔軟性の高い、場やスペースのようなものが考えられてもいいのではないかと。
- ・ 円形劇場のような特殊な舞台機構は必要ないと思うが、表現活動をしている人が、実験的で、自分の力を新たに試すことができる創造性を刺激するスペックを持ったスペースがあるといいのではないかと。そのためには、単なる箱で、平台が沢山あるようなものであってもいいと思う。かつて実験的な演劇はテントで行っていたということが思い出される。
- ・ 日本人は、長らく文字や絵による表現ということを中心に発展してきたところがあるが、表現は、文字、平面、立体、楽器等だけでなく、身体や空間を通じての表現があるということ視野にいれておく必要がある。アートの世界も、表現の手法の垣根が融合している現状を見据えておくのがいいのではないかと。
- ・ 今回の将来像（他機能との連携・相乗効果・フレキシブル等）を踏まえると、これらの施設・設備・人的体制を、コンセプトに合わせた機能的に表現できる仕組みを構築していくことが重要である。施設の機能を複合化することはできたとしても、運営としてはばらばらにしているところもある。組織や体制として、しっかりと固定して継続させることで力を発揮できる部分と、新しさを追求できるための司令塔的な役割や、新しい活動を引きだ

す伴走的な役割部分を上手に機能させることを視野に入れて運営体制を考えていくことが重要になると思う。

以上